



喜多埜

夏の知恵

七月下旬から日本列島は猛烈な暑さで、**熱中症**などにより体調を崩された方も多くおられるのではないのでしょうか。今年の暑さは世界的みても凄まじいものがあり、ロシアなどでは暑さの為、慣れない水に飛び込んだりして、**水の事故**が絶えないようです。

このように暑いと冷房が恋しいですが、百年前には冷房などはありません。ではどのように夏を過ごしていたのでしょうか。

まず日本の建物は**夏の暑さを凌ぐ**ための建物であるという点が挙げられ、夏には間仕切りなどを取り外して殆ど吹き抜けに出来ました。また昔は**風の通り道**というのを重視して、この大阪では川筋が東西に多く走っていた事から**西から東に抜ける風を重視**した設計の家が多かったようです。

そして、服装も麻布で、さらに織り方も**羅や紗**と呼ばれる風通しの良い織りで縫製し、汗の乾きやすい格好であったようです。

食べ物も、精をつける為にウナギや、喉ごしの良いものが好まれ、特に瓜科の実は長持ちするので、井戸などに投げ込んで冷やしてそれから食べたようです。**瓜は体温を下げる**効果もあるので、夏には好まれたようです。

現代はクーラーの電源を入れればすぐに冷えますので、暑さに知恵を絞る事もありませんが、昔の人は普段の生活から**暑さを凌ぐ**方法を模索していました。ある意味、生活に知恵を絞らなくなった現代人は生き方が寂しくなったのかもしれない。

神社豆知識「手水」

神社の鳥居をくぐると多くの神社の場合、参道脇に**手水舎**(てみずしゃ、またはてみずや)があります。

時々、水飲み場と勘違いされる方もおられますが、手水舎とは神社に**参拝する前**に、皆さまに不浄のまま参拝するのは失礼にあたるので、**手を浄める為の所**です。

古代では手水舎というものはありませんでしたので、神社の近くを流れる**小川**などで「**禊ぎ(みそぎ)**」してから参拝したようで、手水舎はこの**禊ぎを簡略化**したものです。

皆さまにお会いするという事は**徹底的に心身共に浄めなければならぬ**という日本独自の神道信仰の骨頂ともいえるもので、日本人の**清潔を大切に**する心の原点です。この手水ですが作法としましては、

まず手水舎前で一礼

まず柄杓を右手に持ち**左手**に水を流す。

次に柄杓を持ち替え**右手**に水を流す。

次に柄杓をまた持ち替え、**左手**の手の平に水を貯め、その**水で口を軽く浄める**。

口にあてた**左手**に再度水を流す。

次に柄杓を垂直に立てて、持った所に水を流し、**柄杓の柄を浄める**。

最期に手水舎に一礼

という作法がありますが、大切なのは作法よりも**心身を浄めてからお参りする心**であるという事を忘れてはいけません。

神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、

au、モバイルPC 対応



編著 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀知

